

山川老先生

六十年前外遊の思出

山川老先生

六十年前外遊の思出

武藏高等學校

六十年前の御渡米の思い出
山川校長

一昨年本校第三回外遊生送別會の席上で、山川校長に六十年前の御渡米の思出の御話を願つた。それが二回三回と續いて第四回に至つた。わが國武士の風格を傳へた最後の入たる老先生の青年時代の記録として、非常に面白いのみならず、當時の外遊者は百を以て數ふべきであつたが、その詳しい記録が極めて乏しい現狀に於て、史料としても亦極めて尊重すべきものである。殊に第三回中、敵兵警備の間を、敗餘の一少年が、一刻後の運命をも知らないで脱出した氣持の如きは、他では伺ひ難いものである。涙を含んでそれを語られた先生の眼底には、朝敵たる心がなくして朝敵と呼ばれ、城は落ちて巷は焼け、君臣離散して親子相別れた當時の慘狀が、在々と映つたことであらう。先生半生の事業たる會津戊辰史はその中に世に出よう。しかしこれ等の御話は同書には載るまい。この書は一面會津陷落史として面白い。舊藩主家から尊貴に御入興があり、舊主君の靈も地下に瞑せられた今日。先生も晏如としてこの御話のできたのであらう。

本書を読むには御話の順序からすれば回を追ふべきであるが、内容からすると、第三回

を先づ見た方がよい。米國に入つて米國に心酔せず、外國の學術を修めてよく日本の精神を體現した東北男子の氣分は、第四回に於ても微見できる。

二五九一年四月

山 本 良 吉

右の文を草したまゝで、未だ印刷に附さない中に、先生は白玉樓中に入られた。先生の功業は既に成つてゐるが、先生の志は未だ遂げられたとはいへない。會津史も二千頁ばかり原稿ができてゐるとは何つてゐるが、未だ完成に至らぬ。思想も風紀も憂ふべきわが社會の現状に於て、意見の上の賛否は別とし、先生の長逝は、一樣に哀悼の情にたへざらしめた。本校に於て、やがて催すべき追悼會の席上で頌つたために、この書を急いで印刷に附する。九一年七月一日 重識。

目 次

第一回 渡米事情.....	一
第二回 在 學.....	二
第三回 外遊前談.....	三
第四回 米國漫談.....	三

昭和六年七月十日印刷
昭和六年七月十四日發行
非賣品

東京府下板橋町字瀧野川二四六二

編輯者 田村友三郎

印刷者 東京府下落合町四ノ一七七五
溝口榮

發行所 武藏高等學校
友會